

桐壺卷の『長恨歌』と和歌との関係

藤河家 利 昭

はじめに

『源氏物語』桐壺卷の、帝と桐壺更衣の物語が、『長恨歌』に依拠するとともに、その独自の展開を遂げていること、また『長恨歌』がこの物語に引用された意味等については諸氏の論がある。ここではそれらの論をふまえつつ、この『長恨歌』受容の問題を、和歌との関係という側面から捉え直してみたいと思う。これは『長恨歌』の詩句をふまえながら、和歌がどのような独自性を発揮しているか、またその和歌が物語においてどのような役割を担っているかという問題である。

一

帝の使いとして、亡き桐壺更衣の里邸を弔問した鞍負命婦が帰参した場面から見ていきたい。

このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢・貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。
(1・三三)
(注1)

亭子院が描かせた『長恨歌』の絵には伊勢・貫之に詠ませた和歌と漢詩が書かれてあつて、帝も近頃はそうした内容のことを常に口にのぼせていたという。この桐壺巻でも、『長恨歌』をふまえた伊勢の歌が引かれ、またその詩句が引かれている。しかし、『伊勢集』では、宇多帝が『長恨歌』の屏風に、歌を詠ませたとあるだけで、漢詩のことは出てこない。「大和言の葉」だけでなく「唐土の詩」を加え、両者を並立したのは桐壺巻の独創と考えられる。^(注2)漢詩は『長恨歌』の詩句そのままを引いたものとすれば、その内容を詠んだ和歌をそれに並ぶものとして置いていることが注意される。これ以後、物語はここに示された帝の様子

に沿って展開していくと言うことができる。

命婦は、更衣の母君から贈られた形見の品を帝の御覧に入れる。

かの贈物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵ならましかばと思ほすもいとかなし。

たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

(三五)

この歌の前には、亡き楊貴妃の住み処を捜し出したという証拠の釵のように、母君からの贈り物が、亡き更衣の住み処を捜し出した証拠の釵であつたと思つても、これはそうではないので甲斐がないという帝の心が示されている。歌はそれを受けて、人伝であつても更衣の魂の在り処をそこと知ることができるように、尋ねて行く道士があつてくれたらという帝の願いを表わしている。地の文の帝の心中からそのまま続いて帝の願いが述べられたものと見られる。歌の前に「ならましかばと思はず」とあり、歌にも「もがな」と、共に帝の期待・願望を表わす言葉がある。また前文の「亡き人の住み処」、「尋ね出で」は、歌の「魂のありか」、「たづねゆく」にそれぞれ対応しているからである。

『長恨歌』の引用においても、前文の「亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵」は、「唯旧物を将ちて深情を

表はさんと 鉤合金釵寄せて将ちて去らしむ」^(注3)により、こ

の歌は、「臨邛道士鴻都の客 能く精誠を以つて魂魄を致く 君王が展転の思ひを感じしが為に 遂に方士をして殷勤に覓めしむ」による。歌は、前文の『長恨歌』の、方士が持ち帰ったという「しるしの釵」に触発されて、更衣の魂の在り処を尋ねて行く道士を求めるものになっている。

このように前文と歌とは内容、表現共に密接な対応を見せている。その上で『長恨歌』と和歌との関係について考えてみる。前文では『長恨歌』と更衣の場合との相違が明確に示されている。これは、更衣の形見の品ではあつても、「亡き人の住み処」を捜し出して持ち帰ったものではない。そこで歌では、玄宗のように例え人伝でも、あくまで更衣の「魂のありか」を知ろうと願うのである。もたらされたのが同じように故人の形見の品であるので、却つて玄宗とは異なる帝の立場が明確になるとも言える。帝は恐らく玄宗のような方途を持ち得ないと思つてゐるであらう。しかし、それにも拘わらず帝の「魂のありか」を知ろうとする強い願いが示されたことになる。

『長恨歌』では、楊貴妃の形見の品とそれに寄せた誓いの言葉によつて幕切れを迎える。この命婦弔問の段が、方士が蓬萊宮に楊貴妃の魂を訪ねる場面に想を得たものである

ことは諸氏によつて指摘されている。しかし、歌では、更衣の形見の品に満足できず、却つて『長恨歌』で言へば、その順序を廻つてあらためて道士を求めるところに戻つてゐるのである。これは、『長恨歌』に基づきながらも、それとは異なる展開を意図的に物語が取るうとしてゐることを示すものではなからうか。

このことは、これにすぐ続く、『長恨歌』を直接に引用した部分に表われていると考えられる。

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなし。太液芙蓉未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりる命のほどぞ尽きせずうらめしき。

帝は、近頃、「長恨歌の御絵」を明け暮れ見ていた。その絵に描かれた楊貴妃の姿は生彩に乏しい。「太液芙蓉未央柳」は、「太液の芙蓉未央の柳 芙蓉は面の如く柳は眉の如し」によるが、その詩句も絵に添えられていたのであろう。その「太液芙蓉未央柳」に似通う顔形を唐風の装いで飾つた

姿は端麗であつても、やさしく可憐な更衣の姿は、「花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき」と、その顔形は花の色、鳥の声にも例えようがない。「花鳥の色にも音にも」は、和歌的表現である（^{註4}）。「花鳥の色をも音をもいたづらにもものうかる身はすぐすのみなり」（^{註5}）後撰集卷四夏、藤原雅正）。ここでは楊貴妃の姿は、更衣の姿を引き立てる役割を持たされてゐる。その楊貴妃の姿を形容するために『長恨歌』が引かれ、更衣の姿を描くために和歌的表現が用いられてゐることは注意すべきことと考えられる。

このことは次の文においても同様に考えられる。「翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに」は、「天に在りては願はくは比翼の鳥と作り 地に在りては願はくは連理の枝と為らむと」による。また「尽きせずうらめしき」は、「天長地久時有りて尽くるとも 此の恨みは綿々として尽くるの期無けむ」による。『長恨歌』の「此の恨み」は、比翼連理の契りがかなわなかつた恨みであると考えられる。桐壺巻の場合は、「かなはざりる命のほど」に対する恨み、即ち更衣の命が帝の思い通りにならず短命に終わったことの恨みであると考えられる。これは、更衣の死が帝の中ではいつまでも受け入れがたいことを示している。

このことに関わつてゐると考えられるのが、帝と、宮中

を退出しようとする更衣との遣り取りである。

「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを、さりとち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、(二三—三)

比翼連理の契りが来世においての契りであるのに対して、これは現世においての契りであるという点で対応していると考えられる。帝が、定められた死出の道にも一緒にという約束をしたのだから、いくら何でも私を置いてはいけませんと言いのを、更衣は本当にいたわしいと見申しあげて歌を詠む。その歌は、これが定めと思ってお別れする死出の道が悲しく思われるにつけていきたいのは命の方ですと、帝の心に応えようとする。それと同時に、このようになるとかねて存じておりましたら、そのような約束をいたすのではありませんでしたのにと言う。帝の言う死出の道にも一緒にという契りに対して、歌では、更衣の命の思い通りにならないことによつて、その契りがかなえられない悲しみを込めている。それは、一面で、更衣が入内してから今

に至るまでの結果が、こういう形で示されていると考えられる。

それは、母君が命婦に訴えた言葉の中に、「よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる」(三二)とあり、母君の立場では横死のような死に方と受けとめられている。また、これに答えて命婦が伝えた帝の言葉には、「わが御心ながら、あながちに人目おどろくばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ」(同)とあり、長くは続かない更衣との縁を辛いものだったと言っている。これは比翼連理の契りがかなわず、更衣が短命に終わったことを恨めしく思う気持ちと通じるものがある。

更衣の歌に見られる、契りに応えられない命のあり方は、比翼連理の契りが、思い通りにならない更衣の命によつてかなわないうと同類である。このように見ると、「かなはざりける命のほど」は、この更衣の歌の「いかまほしきは命」と呼応しているのであらうと考えられる。『長恨歌』の比翼連理の契りによりながらも、その恨みを更衣の歌によつたと見られる「かなはざりける命のほど」としたところに桐壺巻の特徴がある。これは『長恨歌』とは異なる物

語の展開を意味しているのではなからうか。

このような漢詩文と和歌的表現との組み合わせは、同じく命がままならないことを、更衣の母君の立場から命婦に述べた中にも見られる。

寿さのいとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はむことだに恥づかしう思ひたまへばれば、ももしきに行きかひはべらむことは、まして、いと憚り多くなん。

(二一九)

「寿さのいとつらう」は、「寿ければ即ち辱多し」(註六) (外篇・天地)に、「松の思はむことだに恥づかしう」は、「いかでなほありとしらせじ高砂の松の思はんこともはづかし」(註七) (古今和歌六帖五・名ををしむ)による。『莊子』によつて長生きをすれば辛さを身にしみて知られるとするのに加えて、『古今和歌六帖』歌によつて松がどう思うかということ、即ち人目が憚られるのを理由として参内することを断っている。『莊子』にも「辱多し」とあるが、それは「いとつらう」とし、「恥づかしう」とするのは、「松の思はむこと」即ち人目のためとして、入内を断る理由としてよりふさわしいものとしている。基本的には漢詩文によりながらも、細やかな心情は和歌的表現によつていのである。

このような母君の命婦への訴えは、帝によつて次のよう

に受けとめられている。

「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに思しやる。「かくても、おのづから若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。寿くところ思ひ念ぜぬ」などのたまはす。

(三四)

帝は、「宮仕の本意」が更衣の死によつて挫折したことを哀れむとともに、その代わりに若宮の将来に望みをかけるように言い、また母君に対しても「寿く」と慰めている。帝の若宮を氣遣う歌、「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(二一九)に対して母君が答えた歌、「あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」(三四)にも応えたと見られる。

中西進氏が、「白詩には見えない皇子が『源氏物語』に登場するのは、更衣の命のはかなさと対置させられた、次代の命の存在としての意味をになつてのものだつたろう」(註八)、古沢未知男氏も、「それ(筆者注「源氏の参内」)は恰も長恨歌に於て「鈿合金釵」の一股一扇各其の半を分ち、「但令心似金鈿堅、天上人間会相見。」と言つたのと同じ趣向乃至其の延長たるを思はせるものがある」(註九)と述べられている。

母君によって明かされた「宮仕の本意」は、次世代の若宮の上に実現が予想されると見ることが出来る。更衣が短命に終わったことを悔やむ気持ちは、帝の中で若宮を育む気持ちに形を変えて受け継がれていく。

二

先の『長恨歌』引用の場面と同じ一夜のことである。

月も入りぬ。

雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅
生の宿

思しめしやりつつ、灯火を挑げ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふても、明くるも知らでと思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。

(三六)

ここでは歌からそのまま、「思しめしやりつつ」に続いてるので、歌で帝の思いを述べ、「灯火を挑げ尽くして起きおはします」は、その帝の追慕のありさまを述べたものと見られる。「月も入りぬ」と述べながら、歌で「涙にくるる秋の月」としたのは、それが実景そのままではなく、

帝の心情を反映したものとなっているからであろう。

「灯火を挑げ尽くして起きおはします」は、「夕殿に螢飛んで思ひ悄然たり 孤灯挑げ尽して未だ眠りを成さず」の後句にほぼそのままよっているが、それは歌に言う、宮中では秋の月が涙に雲つて見え、したがって更衣の母君の邸においてもましてそうであろうと思ひやつたからであると考えられる。そのように見ると、帝のありさまには歌に示されたその思いが反映されていることになる。それは、『長恨歌』によりながらも、その内実を変容させていると見ることが出来る。ここでは『長恨歌』よりも和歌の方が主導的位置に立っていると云えるのである。

「月も入りぬ」とあるのは、命婦と母君による歌の贈答の場面に、「月は入方の」とあることから、その場面对応していると思われる。

月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる
涙かな

えも乗りやらず。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる

雲の上人

かごと聞こえつべくなむ」と言はせたまふ。(三三)
命婦は帰参してから「あはれなりつること忍びやかに奏す」(三三)とあることから、この歌も帝に伝えられたと思われる。帝の歌の「浅茅生の宿」は、この母君の「浅茅生」を受けていると見られる。また「いかですむらん」と、更衣の母君の邸では涙に暮れているであろうと思ひやるのは、この「虫の音しげき」とも関連している。さらに「雲の上」と「浅茅生の宿」を対比しているのは、「雲の上人」と「浅茅生」との関係によつていであるろう。これは「長恨歌」の、「頭を回らして下のかた人寰を望む処 長安を見ずして塵霧を見る」と、これは楊貴妃の側からであるが、「蓬萊宮」と「人寰」を対させたところに想を得たとも考えられる。

また帝が更衣の母君の邸を思いやるのは、母君のこととともに、若宮を案じる気持ちも含まれている。これは、命婦が伝えた帝の言葉の中に、「若宮の、いとおぼつかなく露けき中に過ぐしたまふも心苦しう思さるるを、とく参りたまへ」(二八)とあり、帝が更衣の母君に宛てた文の中にも、「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(二九)という若宮を氣遣う歌があつたことからそう

言える。月を「雲の上」と「浅茅生の宿」に共通のものとし、「すむ」には月が「澄む」と、更衣の母君や若宮が「住む」とがかけてあることで、より細やかな心持ちが示されていると言える。したがって、「灯火を挑げ尽くして」ということは、帝のためばかりではなく、母君や若宮のことも思つてということになる。結果として、帝の歌では「雲の上」と「浅茅生の宿」とが「秋の月」によつて一つに結び付けられる。こうして物語は「長恨歌」をふまえながらも独自の方向に展開する様相を呈している。

「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし」は、「遅々たる鐘鼓初めて長き夜 耿々たる星河曙けむと欲するの天」の前句による。「まどろませたまふことかたし」は、先の「孤灯挑げ尽して未だ眠りを成さず」による。「明くるも知らで」は、「玉すだれあくも知らで寝しものを夢にも見じとゆめ思ひきや」(伊勢集・長恨歌の屏風を亭子院の帝描かせたまひて、その所々詠ませたまひける 帝の御になして)による。玉上琢彌氏は、伊勢の歌が引かれたことについて次のようにその重要性を指摘されている。

桐壺哀史を描かんとして想い到つたのは、単に白楽天の長恨歌にとどまるのではない。かつて宇多の帝の仰せによつて伊勢の御が和歌にしたことのある、その長

恨歌なのである。^(注1)

物語では更衣生前の皇子誕生前に、「ある時には、大殿籠りすくしてやがてさぶらはせたまひなど」(二九)と、帝の寵愛ぶりが描かれていた。この歌の上句は、「春宵は短きを苦しみ日高くして起く 此れより君王早朝せず」に、下句は、「悠々たる生死別れて年を経るも 魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」による。既に指摘があるように、『長恨歌』では楊貴妃生前のことと死後のことであるが、歌ではそれを上句と下句で対比させたことになる。しかし、「夢にも見じとゆめ思ひきや」(群書類従本は「夢にも見じと思ひかけきや」)は、嘗ては夢の中でも逢えないとは想像できなかったということであり、それは否定的な表現ながら、楊貴妃生前の二人の姿を表わしたものとしてみ用いられている。そのような二人の姿が、死後の夢でも逢えないことと対照されて帝の悲しみを際立たせる。

「明るくも知らで」と思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり」は、先に引いた『長恨歌』の「春宵は云々」をそのままふまえる。しかし、朝政を怠る理由は、『長恨歌』では楊貴妃を寵愛するためであるが、桐壺巻では、更衣を亡くし、夢でも逢うことができない帝の悲しみのためである。「あくるも知らで」の歌によってそのような転換

がはかられているのである。また歌は、過去と現在を対比させることで、夢でも逢うことができない帝の悲しみを深めている。このような帝の更衣を追慕する姿は、玄宗とは異なったものということになる。また中西氏は、この帝が朝政を怠るという叙述についても、「それを(筆者注 命婦の)派遣の結果においたということは、派遣によつてもなお慰めがたい心を表現しようとしたからではないか」と言われている。^(注2)

この「あくるも知らで」の歌は、下句が「魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」によるので、初めの帝の歌、「つてにても魂のありかをそこと知るべく」と首尾対応していると見ることができ。また、その帝の歌は、『長恨歌』にそのまま沿った内容であるが、「あくるも知らで」は、『長恨歌』によりながらも、更衣死後の悲しみを生前と対比した独自のものになっている。その間の主題は、更衣の魂の在り処を探し求めたいと願うが、結局は更衣が夢の中に現われないことを嘆くものである。

この帝のありさまは、次のように帝の側で仕えている全ての男女の嘆きの言葉を導き出す。

「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事にふれたる

ことをば、道理をも失はせたまひ、今、はた、かく世の中のことも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と他の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。(三七)

ここでは、多くの人の「譏り、恨み」をも憚らず、桐壺更衣のことでは「道理」をも失ひ、今は今で「世の中のこと(政治)」をも留意しなくなつたというように、現在に至つた経緯をたどっている。その帰結の部分である「かく世の中のことを思ほし棄てたるやうになりゆく」は、先の朝政を怠ることを受けている。そして、その原因は、先述したように「明くるも知らでと思し出づるにも」、即ち、あれほど睦み交わしたのに今は更衣が夢の中にも現われないためである。このような経緯は、結果として「他の朝廷の例」を引き出すことになる。

この部分は、この巻冒頭の「唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけりと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに」(二七・八)と対応し、その異朝の例、即ち楊貴妃の例を引き出すに至つたと言われるが、それが更衣の魂に夢でも逢うことができない故というように、ここに至つて物語の内実が変容していることの方

が重要である。このような展開の結果として、藤壺宮が登場すると考えられる。

終 わ り に

桐壺巻において、和歌は『長恨歌』に依拠しながら、独自の方向に物語を導いていく。『長恨歌』では方士が蓬萊宮を尋ね、「天上人間会す相見む」という楊貴妃の約束もたらされる。それに対して、桐壺巻の帝は、更衣の魂の在り処を尋ねることはできず、夢の中でも逢うことはできない。二人の間は絶たれたままである。しかし、「昔の形見」として若宮の参内が促され、国政をも顧みない事態に至つて、更衣の「かなはざりける命」に代わるものとして藤壺宮が登場するのであらう。このような物語を導くのが和歌であり、また和歌的な表現と考えられる。作者は『長恨歌』をふまえて新しい物語を作ろうとしたのであるが、その核心において、和歌は、その特色を生かすことによつて漢詩文に対して主導的な役割を果たしている。

注1 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、冊数と頁数を示す。以下同じ。第一冊は冊数省略。

注2 葵卷の、源氏が葵上を追慕した手習に、「あはれなる古

注12 注8の書二頁

言ども、唐のも大和のも書きけがしつ」(2・六五)とあり、『長恨歌』の詩句に歌が詠まれている。

注3 『長恨歌』本文の引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語1』の付録による。

注4 『源氏物語』の例としては、「大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。」(薄雲 2・四六二)がある。

注5 『後撰集』本文の引用は、新編国歌大観第一巻勅撰集編(角川書店)による。

注6 『莊子』本文の引用は、注3に同じ。

注7 『古今和歌六帖』本文の引用は、新編国歌大観第二巻私撰集編(角川書店)による。

注8 中西進著『源氏物語』と白楽天「一桐壺」一七頁 岩波書店 一九九七年七月

注9 古沢未知男著『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』「第二章 様式技法 第一節 桐壺巻と長恨歌(同工式引用)」九八頁 桜楓社 昭和三十九年六月

注10 『伊勢集』本文の引用は、新編国歌大観第三巻私家集編I(角川書店)による。

注11 玉上琢彌著『源氏物語研究 源氏物語評釈別巻1』「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御一源氏物語の本性(その四)」一三二〇頁 角川書店 昭和四十一年三月